五人の仲間

吉岡　晶子

ここに五人の男児がいる。現在年長組。五人とも三歳入園の三年保育。五人は仲良しで一緒にいることがとても多い。そのことが私の悩みであり、ああでもないこうでもないとずっと考え続けてきている。

まずメンバーの紹介。

A夫…四月生まれ。しっかりもの。「行くよ」「〜しよう」などかけ声をかける。

B夫…五月生まれ。一人っ子。もめごとや争い事は苦手。自分の判断にちょっと自信がない。

C夫…六月生まれ。言葉が豊富で自分の気持ちをはっきり言葉にする。細かいことが気になる。よく泣く。

D夫…七月生まれ。好奇心、探究心旺盛。運動はややにがて。

E夫…十月生まれ。気が小さいが素直。自信がなくてはじめてのことは手を出さない。

三歳で入園し、いつ頃からか登園するとA夫、B夫、C夫、D夫の四人がまず積み木の所に誰からともなく集まり、ひとしきり四人で遊ぶという日が続くようになった。一区切りすると四人一緒に園庭に出て遊び、降園時に集まる時も四人並んでいるという毎日だった。この頃はまだ一緒にいることはそれほど気にならず〝居場所があるんだな〟と思ったりしていた。

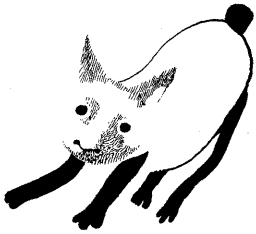
そのうちにE夫がこのメンバーに加わり、五人は特にけんかをするでもなく困った時には「先生」と来るが、自分達でよく遊んでいた。五人もいるのによく遊んでいるなと思ったりしていた。泣き声が聞こえるとたいていはC夫。「みんながぼくをおいてった」「ぼくを待っててくれない」など大声で泣く。四人はそんなつもりはなくC夫がちょっと出遅れただけなのだが本人にしてみればそういう気持ちだったのだろう。そんなC夫をのけものにもせず五人でぞろぞろ動いていることが多かった。しかし私は五人で遊んでいることは知っていたが、その中で一人ひとりがどのような存在かはよく解っていなかった。

そのような五人のことがだんだん気になってきた。五人だけの世界でいてよいのだろうかと。クラスの中の男児十人のうちの半分の五人がかたまっていることの他のメンバーに与える影響もあるだろう。

二学期の後半のある日、D夫が段ボールをおしりの下にしいて斜面をすべっていた。めずらしくD夫と私と五人以外のメンバーでキャーキャー言いながらすべり、D夫はうまくいくようにすわり方や足のけり方をいろいろ試していた。しばらくすると「Bちゃんたちは?」とあたりを見回し、近

くにいないとわかると段ボールを持って保育室に走って行った。私も後を追いかけた。四人が歩いているのを見つけると「Bちゃーん！」と言いながら追いかけ、途中で立ち止まって手にした段ボールを一瞬見つめた。そして段ボールをしっかり持ってひきずりながら「待ってー」と走っていったのである。D夫はもっとすべりたいけどみんなと一緒にもいたいのだろう。自分がやりたいことよりも仲間への気持ちのほうが強いのかも知れないが、その光景を見てそれでよいのだろうかと考えてしまった。

その後も五人のことが気になり、遊び方や一人ひとりがどうなのか少しでも知りたいと思い、仲間に加わって一緒に遊んでみた。A夫が中心になっているがボール一個を持っただけでも結構楽しそうに遊んでいる。A夫が強引なわけでもなくいやいや付いて行ってる様子もない。でもA夫の気が変わると全員がスッと遊びをやめているのをみると、これでよいのだろうか一人ひとりは本当にやりたいことをやれているのだろうか、人の動きばかり気になっている毎日でよいのだろうかという気持ちが日に日につのっていった。



ときには一人ずつに「今何をしたいの？」と聞いてみたこともあった。自分のやりたいことを意識してほしいし集中してほしいと思っていたのである。聞くと「○○ちゃんと遊びたいの」の返事。私もストレートに「○○ちゃんとじゃなくてしたいことは何？」と聞き返したりした。「ブロック」など答えがかえってくると「それはいいわね」と言ったりして何とかその遊びが面白くな

るようにしてみたが、ひとしきりすると再び集まっていた。私のアタックにもめげず毎日毎日五人で過ごしていた。せめてお弁当の時やお帰りの時ぐらいほかの人との出会いがあってもよいのではと思い、ゲームをしたりしてすわる場所を変えるようにもしてみた。今思えば、五人で寄りそい合っていて、みんなと一緒にいることが安定の場になっていたのだろう。それを、少しは離れてもと思ってかかわっていたのだから、よけいに寄りそい合ったのだろう。五人でいても一人ひとりがじっくり集中して取り組めるような場を考えての働きかけが必要だったのだろうと思う。

大好きな仲間がいて一緒に遊ぶのは悪いことではない、でも……と思いつつ年中組に進級して、メンバーが増えたらまた変わるかもしれないと期待することにした。

二年目の春をむかえた。予想に反して、クラスの人数が二十人から三十四人に増えたことで、よけいに五人はかたまり団結が強くなってしまった。担任が忙しくしているせいか自分達で遊びをすすめられる五人は、さっさと園庭に出かけ砂場や虫さがしなどでどんどん遊び、困った時や見て欲しい時に「先生！」と来るぐらいだった。グループで遊ぶのは良い、でも一人でも遊ぶ、そして自分の興味は追求していって欲しいという思いはずっと持ったままだった。

ある日、D夫が転んで怪我をした時に、少し室内でやすむことになった。一人でいることになったので、チャンス到来とばかりに「Dちゃん、これやってみる？」と新しいブロックを出してみた。このブロックは部品が細かくて組み合わせ方も結構複雑である。もともと構成したりしくみを考えたりするのがすきで、興味のあることには集

中するD夫、もくもくとやり続けてかなり時間がたった。やっぱりD夫にはこういう時があってもよいのではと思っていたが、その後ブロックのコーナーには五人が集まっていた。〝ああ、やっぱり〟と思ったが、D夫を気にしてやってきた友達ももくもくとブロックをやり、D夫もうれしかったのではないかとその光景に微笑ましさを感じたりもした。

この頃A夫には変化が見られる様になった。五人で砂場で穴を掘ったりトンネルをつくったりしていた。水をくむC夫、トンネルを掘るD夫などみんな夢中になっている。すると突然A夫が「やめた、お山に行こう」と一言。C夫とD夫は一瞬とまどうが、やめてA夫についていこうとする。本当なら続けていたいだろうのにと思ったが、その時はA夫と一緒に行動したい気持ちのほうが強かったのだろう。このような場面がしばしば見られるようになった。私が加わっていて「もっと続けたい」とかメンバーに「続きをしよう」と声をかけたりしてみたが駄目だった。

グループの中のA夫としてでなくA夫個人と付き合って見たいと思い、少々不自然ではあるが「A夫くん、手伝って欲しいことがあるんだけど」と声をかけてみたことがあった。他の四人には、「A夫くんだけで大丈夫」ということにして、A夫と私の二人でおしゃべりしながらいろいろなことをしていた。その途中で、年長児が製作をしているところを通り掛かり足を止めた。空き箱で犬を作っているのをじっと見ているので「作ってみる？」と声をかけるとA夫は「うん」。さっそく材料を一緒にさがして年長児に聞きながら年長組の部屋で作ることにした。A夫もいやがらなかった。ここでも私にはA夫を他の四人から離して置きたいという気持がはたらいていた。A夫は

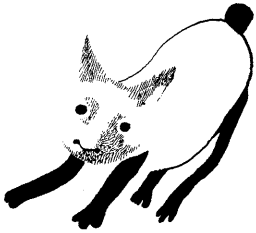
ジーッと見ながら作り、「先生、ここの所こうしたいんだけど」など難しい所になると頼みに来た。かなりの時間をかけて完成させ、できた犬をつれて部屋にもどってきた。この時のA夫の様子を見て、A夫は一人になったらなったで自分の力を十分に発揮できる集中力がある、この力がいかされるようになるといいと思ったのである。この力があればいつも五人でもいいか…と思ったりもした。でも、本当なら砂場の時の様なA夫の言動をもっと考えてみる必要があったと思う。この頃のA夫は自分の存在に少し不安というか自信がなくなってきたのではないだろうか。自分の言葉でみんながついて来るということで自分の位置を確認したい気持があったのだろう。

B夫は「先生！」「先生！」と呼ぶことが増えてきた。「先生、外にいっていいですか」「先生、お弁当ですか」などちょっとしたことを聞きに来る。今までこんなことはあまりなかったのにと思ったが、もしかしたらそれまでは仲間と一緒に行動するのでよかったのが今度は自分で判断しようとしているのかもしれないと思い、B夫が自分の判断することに自信が持てるように心掛けた。

そうこうするうちに、気が小さくて口ではいろいろ言うが実行が伴いにくいタイプのE夫に変化が見られる様になった。フィルムケースのふたで作るタイヤマシンで遊ぶようになってから、F夫やG夫と過ごすことが多くなった。五人の中ではE夫が最初にタイヤマシンを作り、箱積み木を組み立ててコースを作って転がすことを繰り返し楽しんでいた。うまくコースを最後まで転がせる様に積み木を積み直したりスタートの位置を変えてみたりいろいろ試しており、他の四人もタイヤマシンを作ったがE夫が一番この遊びが持続していた。

D夫は仲間の名前の呼び方が変わってきた。Aちゃん、Bちゃん、Cちゃん、Eちゃん、と呼んでいたのが、A！、B！、C！、E！と呼び捨てになったのである。五人のなかではみんなのあとからついていきがちのD夫が仲間との対等な感覚を持つ様になったのではないかと思った。D夫は好奇心旺盛で〝どうして〟〝どうやるの〟〝やってみたい〟など興味があるし、よく考えて追究する力があるのに、友達のことが気になって集中できないことがあり、その良さが生かされてなく仲間に認められていないと感じていたのでこの変化はD夫がもっと認められるのではとうれしかった。

五歳年長組。朝登園すると「Aちゃんは？」「Bちゃんは？」とさがしてまず五人で一遊び。うれしそうに集まっている。春、虫がでてくる時、B夫、E夫は虫探しが大好きだが、A夫はそうでもない。「虫探しに行こう」と掛け声はかけるがじっくり捜すのは苦手。B夫とE夫は見つかるまでがんばる。C夫はいろいろ言うが虫をさわるのは苦手。興味の持ち方の違いで、五人で始めた虫探しも二人と三人にわかれたり二人と二人と一人にわかれたり、別のメンバーと遊ぶことになったりしていた。遊びによってわかれることが増えてきた。



ここへきてA夫がちょっと孤独になった。しかし一人でいるのではない。女児数名の中にいて「Aちゃん、Aちゃん」と呼ばれたり、追いかけられたりして遊んでいる。自分の号令でみんなが着いてくることが少なくなったので、自分を見て

くれて大事にしてくれる居場所を見つけているのかもしれない。そこのところを人を無理に引きつけるのではない動き方やかかわり方ができるような方向で支えていきたい。

いつも人にくっついていてやってもらう、いれてもらうなど受け身の姿勢があるC夫には、逆にC夫を必要としている人がいて頼られる体験があってもよいのではと思う。そのほうがC夫が相手の様子に気付いたり自分自身の自信に繋がるであろうなど、一人ひとりへの思いがある。

長い道程であったが少しずつ一人ひとりの変化や成長が感じられるようになった。今思うと私は五人でいることばかりを気にし過ぎたかもしれない。五人の中の一人ひとりが大事と思いながらも、それぞれがその中でどのような存在でいるのか何を支えていったらよいのかよりも、離れても遊んでほしいと言う気持が強かった。だからよけいに寄り添い合ってしまったのかもしれない。このメンバーではぶつかり合いが少ない。関係が固定してきているのだろう。そのところをもっとよく見て、それぞれが違った立場を体験でき、より対等な関係に近付くようにかかわって行きたい。そうなると一人ひとりが自立するのではないだろうか。

群れをなしている人達へのかかわり方は本当にむずかしい。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）